

県研究主題

一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

提案 1

提案者 丸山 弘之 (横浜地区)

<研究主題>

教科の目標を明確にした地域での校外学習

— 障害種別ごとのねらいを意識して —

1 提案内容

(1) テーマについて

支援級での校外学習では、「楽しむこと」を中心に計画を進めてきており、校外学習における「ねらい」「支援方法」「評価」「次の学びへのつながり」等が明確ではなかった。今回は、教科・領域のねらいを明確にし、支援方法の立案や評価をしながら活動を行い、さらに事後分析の中で障害種別を意識しながら考察していこうと考えた。

(2) 実践

① 日常の様子から考えた個の校外学習のねらいの立案について

- ア 障害種別の異なるA～Cの生徒について、日常の様子とそれについてのねらいを立案。
- イ ねらいは各教科の学習を深めていけるよう、どの教科に当てはまるのかを明確にした。
- ウ 自立活動の内容も明確にした。

② ①のねらいを達成するための支援方法、活動の様子、評価について

- ア ねらいを達成するために個の実態を踏まえた具体的な支援方法を考案。
- イ ねらい、支援方法を実践した上での、生徒の活動の様子を観察。
- ウ 実践後のねらいに対する評価（評価は◎○△で行った）。

③ 事後分析

学習指導要領をベースにして、今回の結果を踏まえ、今後の授業でどのような学習を進めていくべきなのかを分析した。その際、知的障害の有無を軸として参考とする学習指導要領を選定し、今後の学習の広がりや深まりについて表にした。

(3) 考察

- ① 日常の生徒の様子から指導目標、支援方法を丁寧に考えることで、活動内容によって細かく評価でき、曖昧だった校外学習の位置付けか、明確な目標を持った活動へと変容した。
- ② 障害種別や知的障害の有無を軸として、参考にする学習指導要領（一般学級学習指導要領、横浜版学習指導要領個別支援学級編、特別支援学校学習指導要領）を選定したことで、今後の学習の広がりや深まりの方向性が見えてきた。
- ③ 今後も、学習指導要領にある目的や目標を確認し、カリキュラムの根拠を明確にしていく必要がある。

2 協議内容 『協議の柱：作業学習や校外学習、行事などの教科としての位置付け』

(1) 質疑応答

① 個々の目標や評価をどのように生徒に伝え、返しているのか。

→ 普段の生活の中で生活目標を立てており、その目標と今回の学習目標がリンクしているた

め生徒には日頃から伝わっている。返し方としては、行事が終わった後に口頭で伝え、日常でも続けていけるようなフィードバックを行っている。

- ② 成績表(通知票、連絡表)に今回の校外学習の評価はどのような形で反映させているのか。  
→担任の所見欄や各教科欄に行事での取組、または校外学習を通してできるようになったことを評価している。
- ③ 小学生との交流は日常の生活でどの程度行っているのか。  
→小・中のやり方が異なるため、計画していたよりも交流の回数は少なく、作業的な学習と畑での活動を交流授業で行っている程度。科目を広げていくことが今後の課題でもある。
- ④ 小学生と同じ場で学ぶことが多い中で、交流授業ではない方が良いことはあるか。  
→小学生が緊張し、頑張りすぎて疲れやすくなることや、小学校から中学校への環境の変化が少ないため、自分を切り替えるきっかけになりにくく、小学校時のことを引きずったまま中学校へ進学する生徒がいる。

## (2) グループ協議、内容発表

- ① 各学校での取組の情報交換や発表を聞いての感想
- ② 行事や作業学習は教科を横断的に行い、お楽しみ活動として取り組んでいるところが多く、目標を明確にできていないことが現状。
- ③ 少数ではあるが、各教科の教員と連携して教科ごとに目標を明確にしたり、今回の提案程細かくはないが、各教科に結び付けたりして取り組んでいる学校もある。
- ④ 校外学習自体は、総合的な学習の時間や特別活動の授業で行い、活動内容を各教科横断的な内容で取り組んでいる学校は多かった。
- ⑤ 今回の提案を受け、校外学習や作業学習、行事などをもっと各教科と結び付けて、教科としての位置付けを考えていく必要があると感じた。

## 3 まとめ

### (1) 校外学習や作業学習、行事の教科的位置づけ

- ① 教科等の学習が基本となるが、そこで学んだことを実践する場を意図的に行事などに結び付けていき、その中で生徒がどうしているかを評価していく。
- ② 年に一回の行事においても、その行事での様子を見てアセスメントし、計画を立てて、普段の教科授業で意識して取り組み、一年間かけて見ていく。
- ③ 一度に全部の行事、一度に全部の生徒に対して取り組んでいくのは大変だが、意識するということが大事。
- ④ 指導要録にない活動をどこに落とし込めば良いのかとならないようにも、教科としての位置付けをし、評価していくことが必要。

### (2) 障害種別による教育課程

- ① 二つの学級があるのなら、違いがあるのが当然であるのに、同じ学習をしていて良いのか。学校の事情や物理的困難な場合もあるが、生徒の実態に合わせて細かく学習内容を考えていく必要がある。
- ② 基本的には小・中学校の学習指導要領に基づいた教育課程を考えていくが、難しい場合でも教える側が意図したもので教育課程を考えていくことが大事である。

＜研究主題＞

自立と社会参加に向けた指導の工夫と改善

— 体験活動の達成感を生かし、自己肯定感を育てる —

1 提案内容

(1) 本校の特別支援学級

① 生徒の実態、学校生活の様子

② テーマ設定の理由

- ・ 自分の意思を言葉で伝えられる一方で、交流級では自信がない。
- ・ 自己肯定感を高めるための活動の一つとして3年間継続する職場体験を取り上げる。

(2) 実践

- ・ 体験先の選択方法
- ・ 事前学習の取り組み…電話のかけ方、通勤経路の確認、あいさつやマナー、事前訪問
- ・ 事後学習の進め方…支援級で保護者にも発表、『働く』意識の変容

(3) 結果

- ・ 細かな配慮と保護者の協力で、充実した2日間の活動となった。
- ・ 体験から学んだことを学校生活で生かす意識付けができた。

(4) 考察

- ・ 卒業後を想定した職場を選択し、今までの先輩たちも行ってきた活動であることで、将来のイメージを持ちにくい支援級の生徒も意欲を持って活動できた。
- ・ 成功体験の積み重ねが自己肯定感を高めることにつながった。

2 協議内容

(1) 質疑応答

Q 1 職場体験はどんな形態で行っているのか。

A 1 通常の学級の生徒は職場体験がなく、特別支援学級だけ3年（つまり一人3回）行っている。前年依頼したところのほか、生徒の実態に合わせて特別支援学級の担当者が開拓する。

Q 2 体験先の割り振りはどうに行っているのか。

A 2 成功体験を得ることが一番のねらいなので、得意なことを活かせるところが基本。日常会話からさりげなく情報収集したり、卒業後にマッチしそうなところや落ち着いてできるところを選んだりする。翌年はどこにするかも想定して、職員間で話し合いを重ねている。

Q 3 体験先の人数はどのくらいなのか。

A 3 先方に何人まで受け入れられるのか聞くので、複数になることもある。

3 グループ協議、内容発表

＜職場体験における目標設定、評価、及び事後指導＞

- ・ 学校事情により交流学級の2年時の職場体験と同時に行うか、支援級独自で実施するかどちらか。ただし交流学級と同時に行う場合は、事前・事後指導をどこまでやるのが難しい。

- ・ 生徒の実態に応じて、学年の目標かコミュニケーションの目標に設定する。評価は総合的な学習の時間として文章で行っている。
- ・ わが子の職場体験を通して保護者の理解が深まることもある。保護者にも働くところを見てもらいたいがなかなか難しい現状がある。特例子会社等の見学会などがあれば勧めている。

#### <自己肯定感を高めるとは>

- ・ 「学級で受け入れられている」「安心してクラスにいられる」→「社会でも生きていける」
- ・ 学級会で発言する機会を持つ  
…自分の意見・考えから発展し、自分なら何ができるかを提案する。
- ・ 生徒同士の関わりを生み出すには、教員同士の共通理解が重要である。

#### 4 助言

中学卒業時に「お金だけではない、こんな仕事をしてみたい」と意識を持ってほしい。自立と社会参加の最終的な形は就労である。社会の風に当たることで今まで以上に成長する。県内13か所に就労援助センターがあるので相談してみるとよい。

#### 5 まとめ

- ・ 特別支援学級の学習活動の目標は「働く、生活する、遊ぶ、関わる」である。これを教科に落とししていく。
- ・ 学びの地図は道標で、地図だけでは見えない。
- ・ 改訂のポイントは 教育課程の連続性、キャリア教育の充実、生涯学習である。